

# 1-2

地区の災害リスクと災害対応力を知る・考える

## 堺市編

### (3) 堺市防災まち歩き：御池台地区

三田村 宗樹

堺市南部の御池台は、石津川上流部と石津川の支流にあたる和田川の谷に挟まれた標高70～120mの丘陵部を開発した宅造地にあたります。もともと起伏地である丘陵部を平坦化したことから、尾根部が削られ、谷部に尾根を削った土砂が投入され盛土地となっています。内陸部であり、河川沿いの低地から高い位置に宅地があることから、水害についてのリスクは大きくないとみられます。堺市南部の地域ですので、北部を走る上町断層帯地震での揺れよりも、中央構造線断層帯地震での揺れの方が大きいとみられていて、震度6強となる揺れにみまわれることは考えておく必要があります。1980年ごろからの住宅地で、その多くは1981年度以降に建てられた新耐震基準の建物であるとみられます。このことから大きく倒壊する可能性のある建物はほとんどないと思われます。この町での災害リスクはあまり高くないように見られます。では、どのようなところに注意すべきか、街の災害時に活用される施設や準備状況はどうか、地区の方々と防災まち歩きを行って、確認することにしました。

2016年11月12日(土)の9時～12時の間、約4kmの道のりで、防災まち歩きを行いました。御池台地域会館から出発し、小学校や公園、防砂水槽、地区の地形、盛土、防災倉庫とマンホールトイレ、地域の昔の姿を伝える石碑などを巡るルートです(図1)。

以下に、見学箇所の大まかな内容をまとめました。



(図1) 堺市南区御池台の防災まち歩きのルート

#### ① 御池台地域会館

地域の自治会館で会館のそばには、地域自治会の設置した防災倉庫が置かれています。災害時は校区が指定する福祉避難所となります。会館内には、避難してくる方々のための非常時の食料なども備蓄されています(写真1)。しかし、その数は限られており、毛布なども十分ではありません。地域で努力してこのような準備を行われていますが、地域会館の日常活用や収納の問題なども含めて、限られた量でしか対応できないのが実情です。これを地域の方々が十分に認識し、日頃からいざというときの各自の備え



写真1  
御池台地域会館と  
防災倉庫

を行うことが重要です。

#### ② 御池台小学校と高架橋でできた遊歩道

御池台小学校は、災害時の堺市指定避難所となっています。敷地内にはマンホールトイレが設置され、地区自治会担当者が必要に応じて、仮囲いを設置し使用できるようになります。敷地の西隅に堺市が準備した防災コンテナが置かれ災害時の備蓄品が置かれています。扉には収納されている備蓄品のリストがあり、マンホールトイレの覆いや毛布・ビニールシートなど、学校体育館での避難に対応するための資材が収納されていることがわかります。その数量は、やはり体育館に収容可能な人数分しかありません。御池台小学校はこの地域全体の指定避難所となっていますが、地域全員の方を収容するわけではありません。

この地域では、各丁の町会単位で一時避難場所にもまず集合し、安否確認や住居の被災状況を把握したうえで、できるだけ自宅避難での対応をお願いし、大きく被害を受けた方に対して、小学校で受け入れる体制をとられています。このことから、小学校体育館に受け入れ可能な人数分のみの備蓄となっています。

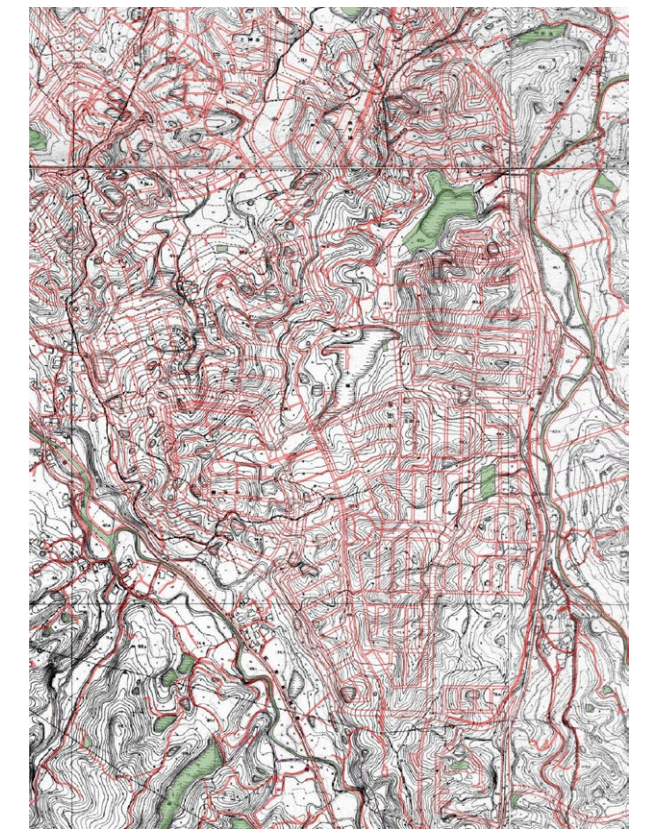
学校の地盤はどうでしょうか?図2にこの地域の開発前の地形図と現在の道路を重ねた図を示します。先にも述べたように、この地域は丘陵部を宅地造成した地域ですので、尾根を削り、谷を埋めてある程度の平坦化がなされています。学校のグラウンド付近は、ため池のあった谷であることがわかります。この谷は現在の田池から南西に延びる谷で、学校グラウン

ドを抜けて、小学校南側の道路に伸びていました。現在の地形でもその名残で谷状を呈した高低差が確認できます。通学路や生活道路として高低差があると不便ですので、学校南側には陸橋が造られ、デッキ状の生活道路が整えられています(写真2)。

阪神淡路大震災では、西宮とその周辺の丘陵地の宅造地で、盛土が地すべりを起こして、宅盤や道路が大きく変形し使えなくなった例があります。このような被害例は、大きな地震の際によく見られます。このことから、御池台でも地震後に谷を埋めた盛土地を通過する道路などが使えなくなることを想定した対応を考えておく必要があります。



写真2  
デッキ状の生活道路



(図2) 御池台の宅地造成前の旧地形図と現在の街区の重ね合わせ  
旧地形図は大阪府航空写真地図(昭和36年)を使用。現在の街区は、国土地理院基盤地図情報を使用。

### ③④遊歩道の連続したフェンスと防火水槽

地域会館から南北に延びる遊歩道の東側には連続したフェンスがあり(写真3)、その途切れた通路部分しか越えられない状況がみられます。一種の線状バリアーとなります。

御池台幼稚園の南側の公園内には防火水槽が埋設されて設置されています。しかし、堺市では、住民による初期消火は認められていないとのこと。一方、大阪市では地区住民により防火水槽から可搬式ポンプを用いた初期消火を行う仕組みとなっていて、各町会では公園などに設置された防災倉庫から可搬式エンジンポンプを出して住民自らが初期消火をおこなう訓練もされています。行政が違うと、このような対応の差異がみられます。



写真3  
遊歩道の連続した  
フェンス

### ⑤沖積谷との比高

御池台は、丘陵部を大規模造成した住宅地であり、周辺を流れる河川の河谷との比高は約10~20mにおよびます。この地点からは和田川の沖積低地と宅地との標高差が確認できます(写真4)。



写真4 御池台と沖積谷の高低差

### ⑥御池台配水池

御池台地区の南端部に位置する標高の高い位置に堺市水道局の上水道配水池が設置されています(写真5)。円筒形のタンクで2基設置されていて、新規のものは耐震配水池となっています。この耐震配水タンクは、地震時に自動的に弁が遮断され、タンク内の飲料水を保持できる構造になっています。一方、古いほうのタンクは、給水を続け、御池台やその周辺の地域に給水を続ける仕組みです。地域の水道管が大きく破損しない限り、御池台地域に給水が保たれる状況にはあります。配水池の敷地には非常用給水栓が設置されていますが、配水池前の道路が狭いため、住民がここに給水に来ることは現在できません。



写真5  
御池台配水池

### ⑦⑧旧谷地形・谷埋め盛土の末端の状況

御池台配水池から北に行くと支援学校があります。支援学校北側もまた、造成前に谷であった地域で、現在の調整池に西側に、現在でも緩やかな谷形状が認められます。ここから、御池台小学校東側の道路を通過して御池公園に向かいます。

先にお示したように、小学校敷地から、御池公園

をとおり田池南端に延びる谷地形がかつてありました。池の南端の斜面は造成時に構築された谷埋め盛土の末端に相当します(写真6)。この斜面に盛土内排水のための暗渠の出口が確認できます。



写真6 谷埋め盛土の末端

### ⑨マンホールトイレと防災倉庫

御池公園運動広場の東側のグラウンドに行くとマンホールトイレが堺市によって設置され、防災倉庫もおかれています(写真7)。



写真7 マンホールトイレ

### ⑩庭代集落記念碑

この地区の大規模造成によって丘陵帯谷あいにあった庭代(にわだい)集落は盛土下に埋没しました(写真8)。それを後世に残す記念碑が建てられています。本来の庭代集落は、現在の御池台一丁北部から庭代台一丁南部の地域に相当します。このような石碑は、この地区の造成の経緯を垣間見る貴重なものです。地域の成り立ちを知るためにも、このような石碑



写真8 庭代集落記念碑

をみんなが認識しておくことが大切でしょう。